

## P2-034

## 性分化疾患に伴う原発性無月経女性が医療受診で受けた体験

石見 和世<sup>1</sup>、住吉 智子<sup>2</sup><sup>1</sup>帝京大学 医療技術学部 看護学科<sup>2</sup>新潟大学 大学院 保健学研究科

## 【目的】

性分化疾患に伴う原発性無月経女性にとって、自己の疾患に関して医療機関で受けた体験は、その後の医療機関との信頼関係構築に影響を及ぼす重要な体験である。適切な看護支援を考えるにあたり、性分化疾患患者が医療機関の初診時に医療者から受けた、ストレスとサポート体験の内容を明らかにする。

## 【方法】

- 1.対象者は、25歳以上の病名告知を受けている性分化疾患に伴う原発性無月経女性。
- 2.期間は、2018年11月～2019年2月。
- 3.方法は、半構造的面接法にて個別に初診に至る動機、診察時に受けた辛い体験、医療者からの支援について聞き取りを行った。
- 4.分析は、データは逐語録化した上で質的帰納的に分析した。意味内容ごとに

## 【カテゴリー名】

をつけた。倫理的配慮は、研究者の所属大学及び研究協力機関の倫理審査委員会の承認を得た。

## 【結果】

- 1.対象は11人、年齢は平均35歳(range 25-51)。疾患は、完全型アンドロゲン不応症6人、46.XY性分化疾患4人、卵精巢性性分化疾患(XY)1人。
- 2.初診に至る動機は、二次性徴未発達8名、幼少期に診断2名、その他1名。
- 3.体質や病気が気になりだしたのは中・高校時代、初診は15歳～20歳代前半、受診先は(産)婦人科が大半を占め、対象者の半数近くは単独受診を経験していた。告知時期は、18～37歳(平均23歳)であった。
- 4.診察時に受けた辛い体験には【診断と治療の難渋】【衝撃を受ける言動】【稀有な存在扱い】【欠如している倫理的配慮】の4つのカテゴリーがあった。医療者からの支援では【安穩できる説明と言葉選び】【信頼感を抱く姿勢】【個人の尊厳が守られていると感じる診療時の配慮】の3つのカテゴリーがあった。

## 【考察】

性分化疾患に伴う原発性無月経の場合、二次性徴の未発達により思春期という多感な時期に体質違和を感じ始めることが多い。この年齢での婦人科受診は心理的に抵抗を感じやすい。また、希少疾患であることから、適切な医療を受けにくいなど不要なストレスにさらされることも多い。診察時は、女性医師の配置や、個人の尊厳が尊重されるよう十分な配慮が必要である。また、会話や説明時の表現方法へも注意を払い、情報の提供と気持ちに寄り添う姿勢が、受診・治療中断への予防策となることが示唆された。本研究はJSPS科研費18K11905の助成を受けた研究の一部である。

## P2-035

## 若年女性の鎮痛剤による月経痛コントロールと月経観および鎮痛剤に対する意識との関連

安積 陽子

北海道大学 大学院 保健科学研究院

## I.目的

若年女性の鎮痛剤による月経痛コントロールと月経観および鎮痛剤に対する意識との関連を明らかにすることである。

## II.方法

月経痛を有する女子看護学生(20歳～24歳)に、無記名自記式の質問紙調査を行った。調査項目は、月経痛、月経観、鎮痛剤に対する意識、鎮痛剤の使用状況、属性である。月経観は、MAQを野田(2001)が改変した尺度を使用した。データは単純集計後、鎮痛剤の使用状況と月経痛と鎮痛剤に対する意識は $\chi^2$ 検定、鎮痛剤の使用状況と月経観はMann-WhitneyのU検定、月経痛と月経観はSpearmanの順位相関係数を算出した。有意水準は5%未満とした。本研究は所属する大学の研究院倫理委員会の承認を得た(承認番号18-38)。

## III.結果

129名を解析対象者とした(有効回答率73.3%)。月経痛の程度は中等度が62.0%で最も多かった。対象者の73.6%が鎮痛剤を使用していた。54.7%が痛みの予感時や痛み始め(以下、早期使用)に内服していた。月経痛が強い者は、そうでない者より鎮痛効果が不十分と回答した者が有意に多かった( $\chi^2=16.4$ ,  $p=0.00$ )。鎮痛剤使用者はそうでない者に比べ、月経痛の程度が強く( $\chi^2=30.3$ ,  $p=0.00$ )、薬のイメージが肯定的であった( $\chi^2=15.9$ ,  $p=0.00$ )。月経痛の程度は月経観4因子と弱い負の相関があり、月経痛の程度が強いほど否定的な月経観を有していた(「衰弱」 $r=-0.21$ ,  $p=0.02$ ;「影響の否定」 $r=-0.35$ ,  $p=0.00$ ;「自然」 $r=-0.23$ ,  $p=0.01$ ;「厄介」 $r=-0.25$ ,  $p=0.01$ )。鎮痛剤使用者はそうでない者に比べて「影響の否定」得点が有意に低く、月経は日常生活に影響していると認識していた( $U=4.00$ ,  $p=0.00$ )。鎮痛剤の心配があるほど鎮痛剤のイメージが否定的であった(副作用への心配 $\chi^2=24.3$ ,  $p=0.00$ ;依存への心配 $\chi^2=8.9$ ,  $p=0.01$ )。鎮痛剤の早期使用者は疼痛顕在期使用者に比べ、月経観の「自然」得点が有意に低かった( $U=2.27$ ,  $p=0.02$ )。

## IV.考察

鎮痛剤使用の有無と、月経痛の程度、鎮痛剤のイメージ、月経観との関連が明らかとなった。月経痛が強いほど否定的な月経観を有する可能性や、観鎮痛剤のイメージは鎮痛剤の知識に影響することが考えられた。したがって、鎮痛剤の適切な服用方法や鎮痛剤の副作用や依存に関する知識の提供が、鎮痛剤による月経コントロールを促進させると考えられた。